

## 100ml water swallowing test 中間報告2014\_July



山部一実:長崎嚥下リハビリテーション研究会

### 100mL水飲みテスト(100WST)

- 現在ヨーロッパでは、水飲みテストといえば、かなり多量の水を飲水する方法が一般的のようです。(次のスライド参照)
- 特に”timed test”が代表的ですが、このテストでは、毎秒当たりの嚥下量を評価しています。  
swallowing capacity or swallowing speed(ml/s)
- 米国では急性期のみならずナーシングホームでも”3oz(90ml)water swallowing test”を利用。

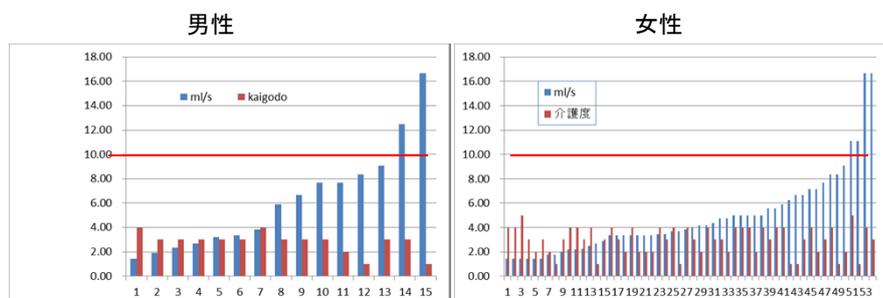
## Swallow Screening Tools

1. Water swallow test (Wade & Hewer, 1987)
  2. 50ml water swallow test (Gordon et al., 1987)
  3. 3oz water swallow test (DePippo et al., 1992)
  4. Standardised swallow assessment (Ellul & Barer, 1993; Perry, 2001)
  5. Burke dysphagia screening tool (DePippo et al., 1994)
  6. Bedside swallow assessment (Smithard et al., 1997)
  7. Timed test of swallowing (Hinds & Wiles, 1998)
  8. Daniels assessment survey (Daniels et al., 1998)
  9. Massey bedside swallow screen (Massey & Jedlicka, 2002)
  10. 100ml water swallow test (Wu et al., 2004)
- :Evaluating Swallowing Dysfunction Using a 100-ml Water Swallowing Test. *Dysphagia* 19:43-47 (2004)

## 今回の報告(2014)\_yamabe

- 2つの老健入所者の方を対象に実施。
- 平均介護度(H26上半期): 3.84
- 平均年齢: 82.7歳(男77.6 女86.8)
- 実際に100mL水飲みテストが実施可能だった方(女性58名、男性18名)に実施。
- 男女ともに加齢と嚥下機能(水飲みテスト)の相関は低かった。
- 介護度との関連は否定。

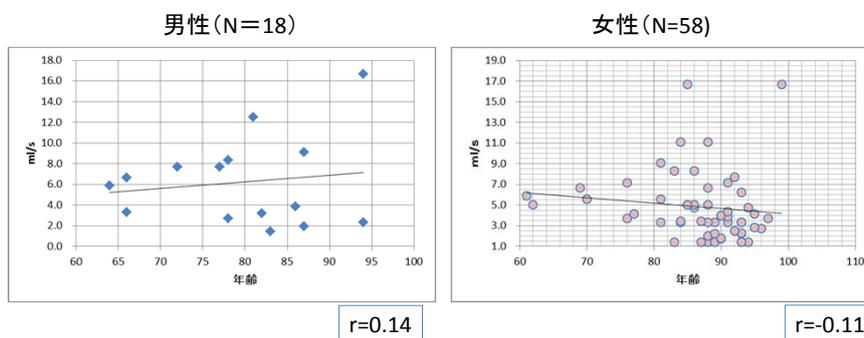
## 100WSTの結果



	no	yes	total
>10ml/s	13	2	15
<10ml/s	50	4	54
Total	63	6	69

## Swallowing speed (ml/s)

<注>我が国における施設入所者での状況



施設入所者では、男女ともに加齢と嚥下機能ではその相関は低かった。

## Silent aspirationの予測

	感度	特異度
反復唾液嚥下テスト RSST:	0.98	0.66
改定水飲みテスト MWST:	0.69	0.88
食物テスト FT : food test	0.72	0.62
100ml水飲みテスト	0.86	0.92

今研究におけるMWSTの結果は全て<4>or<5>であった。

しかし、嚥下スピード(ml/s)の結果では広範囲におよんでおり、嚥下機能の実態は複雑でありsilent aspirationが含まれると考えられる。

100WSTは、感度、特異度ともに高くsilent aspirationの予測には必要な検査ではないだろうか。

## 水飲みテストの質的評価

- 我が国における今後の課題としては、水飲みテストの方法は改定水飲みテスト(MWST)だけでなく、100mL水飲みテストも導入すべきでは？
- 質的評価としては以下の項目を評価することがポイントになるでしょう。
  - ①volume per swallow(ml):1回で嚥下する量
  - ②time per swallow(s):1回の嚥下の時間
  - ③swallowing capacity(ml/s):毎秒当たりの嚥下量

## 感想

- 100mL水飲みテスト(100WST)は危険だと思われるでしょうが、嚥下機能の低下した方は自ら抑制した飲み方になっているので、リスクはないと考えていいでしょう。
- 2年前に学会で報告しましたが、3mlの水飲みテスト(MWST)との関係では、MWSTでは評価できないケースに対しては、100WSTが感度の高い評価方法になるであろうと考えています。

本治験へのご協力をお願いできる施設はご連絡をお待ちしています。